第二次聖学院教育会議第２回会同が開催される

法人本部

３月29日（土）女子聖学院中高クローソンホールで、学校法人聖学院全教職員が参加して「第二次聖学院教育会議第２回会同」が開催された。

聖学院中高の中川寛チャプレンの司式で開会礼拝がもたれ、先に新任教職員就任式と辞令交付式、新表彰制度表彰が行われた。

その後、大木英夫理事長による教育会議基調講演が行われた。タイトルは『現代日本の状況における聖学院の自覚と使命』。

「東大総長の加藤弘之がキリスト教を批判した『吾國體と基督教』を出版した年に、ガイ博士と石川角次郎先生によって聖学院中学校が始められた意味を考えると、聖学院は出発から大きな志を持って始まったということがわかる。石川角次郎先生は東大法学部予備門に入学したが、その時の綜理（のちの総長）が加藤弘之であった。山路愛山が『現代日本教会史論』の「東京大学派対基督教会」の中でその対立を論じているが、そのような状況を憂いた石川角次郎先生は東京大学を退学し、アメリカに留学、帰国後学習院教授になるが、ガイ博士の求めに応じて聖学院中学校の初代校長に就任した。教育が国家問題なのではなく、今や国家が教育問題となっている日本にあって聖学院は態度決定をしなければならない。聖学院の出番であるが、そのためには聖学院教育は『構え』をもたなければならない。」荒川にかかる吊橋、荒海にかける橋、そして天に昇るヤコブの梯子（はしご）のイメージとたとえを使いながら「聖約共同体」についてさらに具体的に話された。

午後から大木理事長の基調講演を受けて各校責任者が発題と報告を行った。続いて小倉院長が、毎年新任の教職員を対象に行っている「聖学院の建学の精神と歴史」の講演を今年は全教職員に対するものとして「石川角次郎先生とその人脈」を話された。

最後に閉会礼拝をもって午後３時に終了した。